

読み物がいっぱい

大村伸一

すでにお気づきのこととは思いますが、とにけ君はこの国の人間ではない。ではどこの国の人間なのかというと、とにけ君はそれを決して明かそうとしなかった。何か理由があるからだろうと、僕はそれ以上は尋ねることもなかった。

「わたしの名前はとにけです。はじめまして。よろしく」

出会ってしばらくの間、彼はまだこの国のことばの勉強中なのだと言い、わざとこんなふうにたどたどしく言い間違いをして、僕を笑わそうとしたものだ。

だが本当のところ、彼はごく短期間の間にこの国のことばをマスターしていたのだ。たどたどしく話すことしかできないはずのとにけ君が、かわいい女の子が通りかかると、するするとその傍に近づいて

「君たちちょっとかわいすぎるね。まさかと思うけど、遠洋漁業って知ってる？」

と流暢にすこしも間違えずに「えんようぎょぎょう」と言っているのを僕は何度も聞いた。

とはいえ、とにけ君がことばに堪能なのは女の子を前にしたときだけらしく、それ意外の場面では話をすることも文字を書くこともそれほど得意でないことは間違いなかった。

そのころ、何だったのかは忘れたが、急用があつて彼の下宿を訪れたことがある。あらかじめ連絡をとっていなかったので、留守かもしれないと思いながら訪問した彼の部屋には鍵もかかっておらず、僕は彼の名前を呼びながら部屋の中に入ってしまった。

とにけ君は昼間なのに薄暗い部屋の中央に膝を抱えて座っていた。彼は僕には気づかないようで、座ったままぼんやりと何かをつぶやき続けていた。

どうやらことばを勉強しているらしいことはすぐに分かった。部屋の中ははやりのポップスと落語や小説の朗読などたくさんの音源が同時に再生され、彼の目の前にはおびただしい本が、こちらのページ、あちらのページと特に関連のないままに開かれていて、とにけ君の目はその紙の上をあてどなくさまよっている。

僕はなにがなんだか分からなかったが、とにけ君に近寄り、耳元で彼の名前を呼んだ。すぐには僕に気がつかなかったようだったが、しばらくそうして呼び続けていると、ようやく僕の存在を理解し、僕をまっすぐにみつめて、どうしたのだと尋ねた。

それはこっちのせりふだと思いながら、何をしているのかと尋ねると、なかに言語学習だという。僕はそんなやりかたでは、何もかもごっちゃになって学習どころではないだろうと言ったのだが、そんなことはないことにけ君は言い張るのだった。

おそらくそれは本当にとにけ君の、新しいことばの学習方法だったのだと思う。つきあっていた何年かの間、彼はいくつかの未知のことばを学んだのだが、いつもそんなふうにしていたからだ。

その日は、用件をすませると、そんな生活をしていては体を壊してしまうと僕が主張し、とにけ君を外に連れ出すことに成功した。

いつもの食堂に向かう途中、夏の終り頃のまだ緑の葉をつけた木々が並ぶ公園の横を僕たちは通った。

「詩人の言葉は想像によって生み出されていると思うかい。僕はそうではなくて、詩人には世界が言葉に見えるのだと思うんだ。

「ふるいけや　かわずとびこむ　みずのおと」

これはいまそこを飛んでいった雀の羽根を読んだだけだ。羽根はあまりにも素早いから、これだけしか読めなかったよ」

とにけ君がなにか冗談を言おうとしているらしいことは分かったが、僕にはそれのどこがおもしろいのかさっぱり分からなかった。

「そっちの公園は全体としてこう書かれている。

「あめにもまけず、かぜにもまけず・・・」」

宮沢賢治が長引きそうだったので、僕は途中で割り込んだ。

「いったい何の冗談なんだい」

そう言うと、どうして分からないのかなとでもいうように、皮肉なほほえみを浮かべ、とにけ君はこう答えた。

「僕は今、目に見えているものをそのまま読み上げているだけだよ。

信じられないというか、意味が分からないのかもしれないね。僕は、言葉の通りのことを言っているだけなんだがなあ」

僕が少しも理解できていない様子に説明するのをあきらめたのか、とにけ君はそれ以上何も言わずに、しばらくはただ一緒に歩いた。

それでもしばらくすると、黙っていられなくなったらしく、こんなことを言い始めた。

「そうだ、ことばは芸術的感情を伝えるためだけに存在するわけじゃないよね。たとえばそのことは、そのベンチを読むとよく分かる。

「この薬品を使用する際には、医師の診断を受け、・・・」

一段落を読み上げると、とにけ君はこう続けた。

「実際、僕の読んでいることばは、また別のことばを表す文字にもなっているんだ。この公園は文字として、さっき読んだような詩を書いているわけだけれど、公園の中のこの木はそれだけでまたいくつかの文字となり、こう読むことができる。

「たたずむ男は二十倍の債務を負っている。それでもバスの時間はやってきた。海中の漁師は二度、世界の終わりを尋ねる。虚空から・・・」

僕は意味のわからないことを言い始めたのにけ君の顔をのぞき込み、怖いから止めるようにと言ったのだが、彼は何かに憑かれたように、読み上げることをやめない。僕はとにけ君の肩をつかんで、ゆすり、彼の名前を何度も呼んだ。

そしてようやく、とにけ君は読み上げるのを中断し、また僕に気づいたようだった。

木の影に隠れていた猫が、僕の声に驚いて逃げて行った。とにけ君はそれをじっと見ているかと思うとこんなことを言い始める。

「「月が丸い」という文が正しいのは、まさに月が丸いときだ」

猫にしてはうまいことを言うじゃないか。いや、猫が言っているわけではなくて、猫を文字として使った誰かのことばなんだね。そこを勘違いしそうになる。それにそもそも、その「誰か」が存在しているのかどうかもよくわからない。もしかしたら、ことばというものは、ことばの使用というものは、ただの自然現象かもしれないだろう。人間だって、自然現象のひとつなのだから、確かにそう言っても何もおかしくはない。ああ、ここまでは、その猫のしっぽで書かれた文章だがね」

僕はどこからが猫で、どこからが猫のしっぽなのか、少しも分からなかったし、そんなことを考える気にもならなかった。

「もうやめにしないか。ちょっと、退屈なうえに、怖いんだけど」

僕が正直にそう言うと、とにけ君はすこしうなづき、何も怖がることじゃないと、こんなことを言う。

「君は看板の文字を読むとき、いちいちそれを文字だと意識して読んでいるだろうか。そうではないだろう。同じことなんだ。怖がるようなことじゃないよ。

僕はその記述が君を文字として書かれているのだということを理解しているが、君が文字として表現しているその文章を読んでいるとき、君自身は背景となり、君が文字であることを僕はことさらに意識したりはしない。君の胸のあたりは文字として、そう書いてある」

際限なく続くとにけ君の言葉に、僕はもうそれ以上相手をする気力を失った。

「君は勉強のしすぎだ」

僕はそう言うと、彼を置いて走りだし、食堂に向かった。とにけ君が理解しがたく不気味

な冗談をやめない限り、もう彼と話をするのはよそうとすら思った。

だが、食堂で一時間待っても彼は来なかった。次第に僕は心配になった。あれが冗談じゃなくて、とにけ君は何かの病気だったのではないだろうか。一人で歩いているときに発作をおこし、どこかで倒れているのではないだろうか。

僕は待ちきれなくなって、とにけ君が来るはずの方向に、彼の姿を探しながら戻った。

ところが、とにけ君はすぐに見つかった。橋の欄干にもたれて、あたりの町並みを眺めている姿は、すこしさみしそうにさえ見えた。

近づくと、とにけ君はまだ何かをぶつぶつとつぶやいていた。

「国境を抜けるとそこはキリマンジェ口の麓だった。なぜそんなところに真っ白い巨大な鯨が息絶えているのか、町では様々な憶測が飛び交った。国王の愛人である月読婦人ははしたない姿で柱時計と抱き合っている。時刻はすでに半分になっていた」

これは病気に違いない。僕はそう思って、彼の体を抱きしめ、病院につれていこうとした。

だが、とにけ君は、意外にも冷静に僕に話しかけてきた。

「なんだ君か。どうだいこの町はなかなかおもしろい読み物じゃないか。僕は気に入ったよ。これを全部読むまでは、家に帰らないつもりだ」

僕は情けなくなって、涙を流しながら、一緒に病院に行ってくれるように頼んだ。

とにけ君自身には病気だという自覚はなかったようで、そう頼まれて驚いたような表情を浮かべたが、僕があまりにも真剣だからだろう、一緒に病院へ行くことには同意してくれた。

病院までの十五分間、とにけ君はあいかわらず、目に映るものを片端から読み続けた。聞いたことのあるような話があったり、明日の株価に関する予言があったり、あるいは、ここには書けないような露骨で猥褻なポルノがあったりで、もしかするととにけ君には恐ろしい文学的な才能があるのではないかと、僕は思わずにいらなかった。

病院の受付では、とにけ君の症状を説明するのに手間取ってしまった。そんな症状の病気など僕は知らなかったし、受付の女性も想像すらできなかったようだった。

ようやく内科での受診が決まると、どこからともなく若い看護師が近づいてきて紙コップを渡した。なにか口早で聞き取れなかったが、尿をとって来るようにということと、トイレの場所を説明したのだと思う。

病院のトイレは清潔で美しい。きっと五秒おきに誰かが消毒しているのに違いないと僕は考えている。そんな便器を間近で見られるよろこびにわくわくして、いやがるとにけ君の腕をとり、僕はトイレに入った。入り口にはどこのトイレであれおなじような洗面台がある。とにけ君は洗面台の前で立ち止まったのだが、僕は、彼のことは気にもとめず、便器便器

きれいな便器と、歌いながらいそいそと先に奥に進んだ。

清潔で美しい便器は人類の究極の芸術だ。そんなことを考えながらうっとり三つ並んでいる小便器をみつめていたが、しばらくしてとにけ君がなかなか入ってこないことに気づいて、僕は洗面台に戻った。

洗面台の前で、とにけ君は鏡の中の自分を見つめていた。僕が側に行くと、とにけ君は僕を待っていたかのように、それから自分自身を読みはじめた。

この記録は、とにけ君が自分自身を文字として読み上げたものを、僕が口述筆記したものです。